月星晦蒙す。強弩潮を射ば、江海爲めに東す。宏を殺し昌を誅して、吳越を奄有す。金券玉冊、虎符龍節あり。大に其の居に城き、山川を包絡し、江を左にし湖を右にし、島蠻を控引し、歳時に歸休し以て父老を燕す。曄過りたる者にて朝廷を累はせしことなるが、獨り吳越王錢氏のみは、宋の朝廷よりの告諭命令を待たずに、國財を藏れある府庫を封鎖して封印を附け、領内郡縣の土地人民數を地籍戸籍の帳簿に詳記し、朝官の出張を朝廷に請ひ、吳越國を悉皆献し、從來王たりし國を立退くを視るに、傳舍を出立するが如くせり其の錢氏が宋朝に勳功を樹てたること、甚だ大なりとなり。第五節は此の文の主意目的の有る所にて、錢氏の墳廟を保續守護せられんことを請ふ一段を述べ終るなり。それも尙ほ打附に言はず、比較すべき故事を引き、昔し漢朝の竇融は、前漢の末に王莽の亂ありて、天下が大きに亂れし時、河西地方を守り居しに、其の地を後漢の世祖光武帝に歸順し、光武帝は此の忠節を嘉し、右扶風（我が今の三府ならば京都府知事の如し）として、府の尹に詔命して、竇融の父祖先の墳塋を修理させ、其の靈を、天子諸侯の祖先祭祀も同樣なる、太牢の供物にて祠らせたり。

たること神人の如し玉帶毬馬あり。四十一年、寅畏小心にして、厥の篚相望む。大貝と南金と。五朝昏亂して、國を託するに堪ふること罔し三王相承ぎ以て有德を待てり。既に歸する所を獲。謀せず咨せずして。先王の志

（太牢は、牛羊豕を供ふるなり。支那のやかましき國禮にて、大優待とす。）竇氏には光武帝が斯も優待したるが、今錢氏の功勳と德行とは殆んど竇融よりも過ぐ。而るに錢氏の王業が絶にてより未だ百年にも及ばざるに、墳廟が荒れたるまゝにて修治致さぬ。墳廟の下の道路を歩行する者が、心を傷めて嗟くは、忠臣に進む樣とて勸奬し、國民の心を慰め答ふる所以の義に非ざるなり。依て臣は、願はくば龍山に在る廢佛祠の妙因院と曰ふ者を以て觀（位牌納の寺院と云ふ如きもの）と致し、錢氏の孫にて今は道士に爲りて自然と曰ふ者に觀の内に居らしめ、總じて錢塘の地に在る墳廟の向きは、一切自然に付し、臨安に在る者は、其の縣の淨土寺の僧の、道微と曰ふ者に付し、歳毎に何れの方も各々、其の徒一人を得度させて道士とも僧ともして、世墳廟を保護することを掌らしめ、さて錢氏の墳廟地としての地より納まる租稅所入を帖簿に記載させ、錢氏の子孫の者に於

○小心文

我れ維れ之れを行ふ天忠孝に胙ひ、世邑爵を有つ。允に文允に武にして、子孫千億までにす。帝守臣に謂ふ。其の祠墳を治めよ。樵牧をして其の後昆を愧かしむること毋れと。龍山の陽、歸焉たる斯の宮、錢に私するに匪ず。惟れ以て忠を勸めんとなり。忠に非ざれば君を無し。孝に非ざれば親を無す。凡百の有位、此の刻文を視よ。

**字句解**

觀は、道觀にて道士の住む所なり、佛教ならば寺院と謂ふが如きものなり。道士とは、老子教の弘教者なり。

て時を以て其の祠宇を修繕し、草木も封植させ、それを懈りて修治せざること有らば、縣令にても次官の丞にても監察して、甚しき不勤の者は其の保護人を易ふることに致さむ。左樣に致さば庶幾くば永久に保存せられて終に墮てまじく、朝廷が錢氏を優待せらるゝ意に相稱はん。臣抃昧死つて奏聞致す。と、是れまでは趙抃の建言書の文句なり。制して曰く可より以下が、蘇東坡の附けたるものと知るべし。さて、此の上疏書が皇帝の許へ上り、皇帝は制詔して可なり實行せよとありて、妙因院と曰ひし寺號を改めて、名を表忠觀と賜はり故に銘を作る。其の銘には斯く曰ふぞとの意なり。

銘の第一段は、錢鏐の神異なる人格、功業、國力、宋朝への忠節を頌む。錢鏐の誕生地たる臨安なる、吉州の天目山よりは苕水と云ふ河が流れ出る。山の形ちは龍が飛び鳳が舞ふ如くに見ゆる。斯も清らかなる地に、龍又鳳形の靈物形を現はす程ゆゑ臨安には秀靈の神氣が萃まる。故に篤く神異なる錢鏐を生じたり。誠に常人の類を絶ち群を離れたる人にて、梃を奮つて大きに呼はれば、服從する者は雲が集まる如くなり。劉漢宏を討つさき月夜にて河を渡れば敵が心付くを愛へ、天を祈れば月暗くなり。一時の暗夜に河を渡り、敵軍を破りしことあり。又出軍の進路江海に滿潮の妨げしを、强き弩を發ちて潮流を退けたることあり。故に江海は爲めに東に行き。劉漢宏を殺し、董昌を誅し、奄に吳越の地を有し、唐の昭宗帝より受けたる金券、後唐の莊宗帝より受けたる玉册、金券は虎の形ちの割符券、玉册は龍の形ちの符節なるを所有す。されば我が居住地に大に城を築き、山川にて包み絡ひ、江を左にし湖を右にし、島嶼なる蕃人を從へ控引け、歲毎に四時には島へ歸らせて、其の留守せし父老に酒を進めて燕會を開かせ、錢鏐の容貌は曄しきこと神か人かと思はれ、梁の太祖より受けたる玉帶と打毬用の名馬と

入覲は、屬國として、其の屬國の主が、宗主國へ入朝することなり。

三世の世は、父の後を子に、子の後を孫に繼がせたるを謂ふ。

盜名字は、帝號の名字を帝王の資格なき者が稱するを謂ふ。稱すべからざる理由あるにも拘はらず、僭號を稱するは、恰も盜むが如くなればなり。

兵は、刀劍等の兵器なり革は、革具足などの武具なり。されば兵革は戰を以て有し、三世四王の四十一年間は、寅畏小心して、厥の宋帝への献上の饋、道路に相望む。其の物品は大貝より出る眞珠、又は南金と云ふ純金となりとの意なり。

第二段は宋に歸順せしを頌む。五代の更る〳〵帝王になりたる朝廷は、昏亂して吳越の國を託するに堪ふる程の君主は罔く、三代の吳越王相承繼し、道德を有する君主を待ち、既に歸順する所の宋の太祖帝を獲て、說容も何もせずに、先王なる錢鏐の正義なる志をば、我れ維れ之れを行ふとす。天は忠臣だり孝子たる代々の吳越王に胙ひを賜ひ、世々宋より領邑と爵位とを受け有ち、人格は允に文允に武の德具はり、子孫千億代迄も繁わらんと頌めしなり。

第三段は、時の天子たる神宗皇帝の詔命を述べて、皇帝を頌む神宗皇帝は、知杭州軍事たる、錢氏墳廟地の守臣趙抃に對して錢氏の祠墳を修治して、樵夫や牧者に荒させて、錢氏の後昆を愧かしむるなよ。龍山の陽の歸き斯の宮、即ち表忠觀は、徒に錢氏に私するに匪ず、惟れにて忠節を盡すことを一般の者に勸むるなり。忠に非ざれば君を無しとする。孝に非ざれば親を無しとするぞよ。凡百の有位の者よ。此の碑に刻りたる文章を視よと謂ばれしとの意なり。

【文法】此の文の序文は雄麗渾雅、銘も亦絢爛にして目を奪ふと賴山陽先生評せり。

## 送孟東野序　韓昌黎

此の孟東野は、名を郊と云ふ、東野は字なり。韓退之が、友たる孟氏を送る序文なり。



爭の事を意味するなり

僭は、人ごろふとて、下として上の名を盜むことなり。

傳舍は、逆旅なり。

墓壁は、墳墓なり。

【讀法】

孟東野を送る序。韓昌黎。

大凡物其の平を得ざれば則ち鳴る。草木の聲無きも、風之れを撓ませば鳴る。水

大凡、物不レ得二其平一則鳴。草木之無レ聲。風撓之鳴。水之無レ聲。風蕩之鳴。其躍

也或激之。其趨也或梗之。其沸也或炙之。金石之無聲。或擊之鳴。人之於言也亦然。有不得已而後言。其詞也有思。其哭也有懷。凡出乎口而爲聲者。其皆有弗平者乎。樂也者。鬱於中而泄於外者也。擇其善鳴者而假之鳴。金石絲竹匏土革木八者。物之善鳴者也。維天之於時也亦然。一篇筋節主意

擇其善鳴者而假之鳴。是故以鳥鳴春。以雷鳴夏。以蟲鳴秋。以風鳴冬。四時之相推敓。其必有不得其平者乎。其於人也亦然。人聲之精者爲言。文辭之於言。又其精者也。尤擇其善鳴者。而假之鳴。其在唐虞。咎陶禹其善鳴者也。而假之以鳴。夔弗能以文辭鳴。又假於韶以鳴。夏之時。五子以其歌鳴。伊尹鳴殷。周公鳴周。凡載於詩書六藝。皆鳴之善者也。周之衰。孔子



◎小心文

の聲無きも、風之れを蕩かせば鳴る。其の躍るや或は之れを激すればなり。其の趨るや或は之れを梗げばなり。其の沸くや或は之れを炙ればなり。金石の聲無きも、或は之れを擊てば鳴る。人の言に於けるも亦然り。已むことを得ざること有りて後に言ふ。其の詞ふや思ふこと有り其の哭するや懷ふこと有り。凡そ口に出でゝ聲を爲す者は、其れ皆平かならざる者有る乎。樂なる者は中に鬱して外に泄るゝ者なり。其の善く鳴る者を擇んで、

之徒鳴之。其聲大而遠。傳曰。天將以夫子爲木鐸。其弗信矣乎。其末也。莊周以其荒唐之辭鳴於楚。楚大國也。其亡也。以屈原鳴。臧孫辰孟軻荀卿。以道鳴者也。楊朱墨翟管夷吾晏嬰老聃申不害韓非愼到田駢鄒衍尸佼孫武張儀蘇秦之屬。皆以其術鳴。秦之興。李斯鳴之。亦文言漢之時。司馬遷相如楊雄。最其善鳴者也。其下魏晉氏。鳴者不及於古。然亦未嘗絕也。就其善者。其聲淸以浮。其節數以急。其辭淫以哀。其志弛以肆。其爲言也。亂雜而無章。上四句一樣五字、若第五句不用九字、文勢便庸腐、將天醜其德。莫之顧耶。何爲乎其不鳴其善鳴者也。唐之有天下。陳子昂蘇源明元結李白杜甫李觀。皆以其所能鳴。此一句包括多、其存而在下者。孟郊東野。始以其詩鳴。其高出魏晉。不懈而及於古。



之れを假りて鳴らす金石絲竹匏土革木の八の者は、物の善く鳴る者なり。維れ天の時に於けるや亦然り。其の善く鳴る者を擇んで、之れを假りて鳴らす。是の故に鳥を以て春に鳴り雷を以て夏に鳴り蟲を以て秋に鳴り、風を以て冬に鳴る。四時の相推敲するも其れ必ず其の平を得ざる者有る乎。其の人に於けるや亦然り人聲の精なる者を言と爲す。文辭の言に於けるは、又其の精なる者なり。尤も其の善く鳴る者を擇んで、之れを假りて鳴

其他浸淫乎漢氏矣。從吾遊者。李翺張籍其尤也。三子者之鳴。信善鳴矣。抑不知天將和其聲而使鳴國家之盛耶。抑將窮餓其身思愁其心腸而使自鳴其不幸耶。自天字對三子者之命。則懸於天矣。其在上也奚以喜。其在下奚以悲。此二句占地步、東野之役於江南也。有若不釋然者。故吾道其命於天者。序因送孟東野作結、歸東野身上、只兩句、此文章之妙、以解之。

○小心文

らす。其の唐虞に在りては、咎陶禹は其の善く鳴る者なり。而して之れを假りて以て鳴る。夔は文辭を以て鳴ること能はず。又韶に假りて以て鳴る。夏の時に五子其の歌を以て鳴る伊尹は殷に鳴り、周公は周に鳴る。凡そ詩書六藝に載するは皆鳴ることの善き者なり。周の衰ふるや孔子の徒之れに鳴る其の聲大にして遠し傅に曰く。天將に夫子を以て木鐸と爲んとすと。其れ信ならずや。其の末や、莊周其の荒唐の辭を以て楚に鳴る。楚は大

○心小文

此の文章は三節に分けて解くべし。第一節は、友人の孟郊が五十歳まで官途に就かずに、此の年齢にて江南溧陽縣の尉と云ふ次官の樣なる小官に就きて遠地へ行く事ゆゑ、固より不平ならんと察し、其の不平心を解かんが爲めに、先づ物體が不平にて音を發して鳴る、不平が起る理由より論じ起せり。さて言ふに、大凡、物は其平常を得ざれば則ち鳴るものなり。それを例すれば、草木は聲無き物なれど、風が吹き付けて撓ませば、ヒユウ〳〵と鳴る。水は聲無き物なれど、風が蕩かせばゴウ〳〵と鳴る。而して其の水が躍り迸しるは、時として激さする故なり。趨るは時として梗塞ぐ故なり。沸返るは時として火にて炙るが故なり。金屬や石類は聲無き物なれど、これも時として擊てば鳴る。人の言に於ても其の通りで、已むことを得ぬこと有りて不言の平常を持ち得ぬ故に、持ち得ぬ後に言ふ。歌を謌ふは其の心情に思ふことが有りて起る故なり。聲を發けて哭くは

國なり。其の亡ぶるや、屈原を以て鳴る。臧孫辰孟軻荀卿は、道を以て鳴る者なり楊朱墨翟管夷吾晏嬰老聃申不害韓非愼到田駢鄒衍尸佼孫武張儀蘇秦の屬は、皆其の術を以て鳴る。秦の興るや、李斯之れに鳴る。漢の時、司馬遷相如楊雄は、最も其の善く鳴る者なり。其の魏晋氏に下りて鳴る者は古に及ばず。然れども亦未だ嘗て絶えず。就ひ其の善き者にても、其の聲清にして以て浮、其の節數にして以て急、其の辭淫にして以て哀、其の志

心中に哀しく感じ懣ふことが有る故なり。さすれば總じて口より出でゝ聲を爲す者は、其れ皆心に平かならぬ者が有る故乎。又、音樂なる者は、氣が心の中に鬱して、平常を持つことを得さるに依りて身體の外へ泄出づる者なり。それ故に其の善く鳴る者を擇んで、善く鳴る物質の物を假りて鳴らす。樂器として用ゐる、金屬製の鐘の類、石材製の磬、絲を彈き撫鳴らす琴の類、竹製の笛類、匏を胴にしたる笙の笛、土製の缶、革製の鼓太鼓、木製の柷敔（さて、聲の調子を取る拍子木の如き物）の八種の樂器は物の善く鳴る者なり。さて又維れ、天が四時に於て鳴るも亦然樣にて、天地間の存在物の善く鳴る者を擇んで、之れを假りて鳴らす。是の故に、鳥を以て春に鳴り、雷を以て夏に鳴り、蟲を以て秋に鳴り、風を以て冬に鳴る。さすれば、四時が推移し合ふも其れ必ず、平常を得ざる、所謂る不平が有る乎。人に於ても亦其の如く然るにて、人の聲の純精なる者を言さ爲る。文辭は言にては文其の一層純精なる者なり。これも尤も其の善く鳴る者（天理人道を文辭に作り著はす者）を擇み、此の人物を假りて鳴るさの意なり。

第二節は人物の文辭にて鳴ることを、唐虞即ち堯舜時代より唐時代前まで述ぶ。さて言ふに、其の人物は唐虞時代に在りては皆（皐なり）陶と禹とは其の善く鳴りたる人物なり。而して之れ（皐陶は書經にある皐陶謨、禹は同書の大禹謨の文辭）を假りて鳴る。夔は文辭を以て鳴ることを能はざりしかども、又、音樂官なる典樂に爲りて、舜帝の樂なる韶を奏して天下一般の人民を德義の修養して、即ち韶樂を假りて鳴る。夏の時代には、太康王の弟五人が作りたる五子之歌あり。（書經の中に在り）之れを以て鳴る。伊尹は殷朝の大臣にて伊訓を作りて若主太甲を訓ゆ（書經にあり）之れにて殷時代に鳴り、周公は周時代に、詩經にては鴟鴞篇、書經にては旅獒、周誥、君奭等の諸篇にて鳴りたり。

弛んで以て肆なり。其の言たるや、亂雜にして章無し。將に天其の德を醜んで、之れを顧ることを莫からんとするか。何爲れそ其れ其の善く鳴る者を鳴らさざるや。唐の天下を有つや。陳子昂蘇源明元結李白杜甫李觀は、皆其の能くする所を以て鳴る。其の存して下に在る者は、孟郊東野、始めて其の詩を以て鳴る。其の高きこと魏晉に出づ。懈らざれば古に及ばん。其の他は漢氏に浸淫す。吾れに從つて遊ぶ者、李翺張籍は其の尤なり。三子者の

總して詩書六藝（詩經、書經、禮樂射御書數の文等）の書籍に載せある文辭は、皆鳴ることの善き者なり。周の敎化が衰へ、春秋の時代になりて、孔子始め其の徒顏淵始め十哲七十子以上の門弟子が之れに鳴り、其の聲は大にして遠く後世に達したり。（是れ道義を說くこと大にして今に至りて奉ずるに比するなり）傳（傳記の事にて論語を云ふ。）に、天が將に夫子を以て木鐸と爲んとすと書しある。人道を一般に木鐸を振り鳴らして敎へ廻ると形容せしは、其れ信ならずや。（木鐸は金屬製の振鈴の木舌なる物なり。）其の春秋時代の末に、莊周なる者が、荒唐とて遁とせしたる廣大なる辭を以て楚の地に鳴りたり。楚は大國にて亡ぶるときには屈原在りて、此の屈原は離騷等の文辭を爲きて鳴りたり。此の以前に晉の國の大夫の臧孫辰、孟軻、荀卿は道義を以て鳴りたる者なり。楊朱、墨翟、管仲（夷吾は字）晏嬰、老聃、申不害、韓非、愼到、田駢、鄒衍、尸佼、孫武、張儀、蘇秦などの屬の者は、異端雜學なる術を以て鳴りたり。秦が興りて始皇が天下を一統せし時、丞相たる李斯が、逐客の文辭を書きて鳴り、前漢時代には司馬遷（史記を著はす）司馬相如（文章家）楊雄（法言を著はす）は最も其の善く鳴りたる者なり。後漢を歷て三國時代と爲り、蜀吳亡びて魏、次で晉時代に下り。文辭を以て鳴る者は古に及ばず。されども亦未だ絕ねざりしなり。絕ねぬは宜しかりしが、此の時代の文辭は、就し其の善き者にても、文章を誦めば、其の聲は淸らかにても浮き調子にて華にて實が無く、其の節は、數々して急調にあり、其の辭は淫にして哀れにあり、作文者の志操が弛みて肆にあり、大體文章の言意を組立てることが亂雜にて、秩序が無かりしなり。魏は後漢の末帝を弑して帝位を簒ひ、晉は魏の末帝を弑して帝位を簒ひたる不道德極まりし帝業なりし故、天なる上帝が其の不道德を醜惡として、文明にある樣にと願ることを莫からんとせられ

鳴るは、信に善く鳴る。抑々知らず。天將に其の聲を和して國家の盛を鳴らさしめんとするか。抑々將に其の身を窮餓し其の心腸を思愁して自ら其の不幸を鳴らさしめんとする耶。三子者の命は、則ち天に懸れり。其の上に在るや、奚ぞ以て喜ばん。其の下に在るや、奚ぞ以て悲まん。東野の江南に役せらるゝや、釋然たらざるが若き者有らん。故に吾れ其の天に命ぜらるゝ者を道ふて、以て之れを解く。

見捨られたる天罰の故ならん耶。何ぞて其れ其の善く鳴る者を生じて鳴らさざりしか。と不審に思ひたる意なり。

第三節は、現代の唐になりて、文辭を以て鳴りたり人物を數へ孟東野等に及び、其の不平を解くに終りしなり。さて言ふに我が唐が天下を有ちてより後は、陳子昂、蘇源明、元結、李白、杜甫、李觀の先輩、何れも皆文辭の能くする所を以て鳴りたり其の鳴る者の中にて存命して下僚にて卑賤の地位に在る者は孟郊東野なり。始（これは夙にと云ふ意なり）、夙くより作詩の名人を以て鳴る。其の詩格の高きことは、魏や晉時代の作者よりも上に出づる。勉めて懈らざれば、古昔唐虞三代頃の大家名人の地位にも進み及ばむ。秦以降なる其他の時代にても、漢時代の名人の地位には浸淫るならん。吾れに從つて遊ぶ者なる李翺と張籍とは其の尤物なり。孟東野と此の李張二人と、三子者の鳴るは、信に善く鳴るなり。是れ抑々天が、將に三子者の擊を



好き調子に平かに和ぜ、唐の國家の隆盛を鳴らさしめんとせらるゝか。亦抑々三人の者の身が窮困して餓ゑ、心中に思ひ愁ひ即ち心配して、自分に自分の不幸を鳴らさしめんとせらるゝ耶三子者の運命は則ち天に懸る。（人は誰も引擧げ奚れぬとの當こずり厭味を含む）天意次第なるが故に、上位に在りても奚ぞ以て喜ばんや。又、下位に在りても奚ぞ以て悲まんや。人當に思はざれば、只々天命に安んじて喜びも悲みも無き意思なり。東野が江南へ小吏に爲りて行きて役はるゝに、心が釋然ぬ所ある樣に思はるゝ故に、吾れは天に直接命ぜらるゝ理義を道ひて、以にて不平を慰め解くとの意なり。

【文法】此の篇は凡そ六百二十七字、鳴の字三十九あり。讀む者其の繁を覺ゆざるは何ぞや。句法變化凡そ二十九樣、頓挫有り升降有り、起伏有り、抑揚有り、層峰疊巒有り、驚濤怒涙あり一句も怠慢無く、一字も塵埃無く、愈よ讀んで愈よ愛す可しと

讀法

前赤壁の賦。蘇東坡。

壬戌の秋、七月既望、蘇子客と舟を泛べて赤壁の下に遊ぶ。清風徐に來り、水波興らず。酒を擧げて客に屬し、明月の詩を誦し、窈窕の章を歌ふ。少焉あつて月東山の上に出で、斗牛の間に徘徊す。白露江に横たはり、水光天に接す。一葦の如く所を縱にし、萬頃の茫然を凌ぐ。浩浩乎として虛に馮り風に御して、其の止まる所を知らざるが如く、飄飄乎として世を遺れて獨立し羽化して登仙するが如し。是に於て酒を

謝氏は評せり。

## 前赤壁賦

蘇東坡

此の文章は、蘇東坡が二回赤壁に遊びたる前回の遊びに作りたる賦なり。賦は本と詩の六義の一なるが、辭賦とて文章の一體裁と爲りたり。富麗なる詞を用ゆ。

壬戌之秋。七月既望。蘇子與客泛舟。遊於赤壁之下。清風徐來。水波不興。舉酒屬客。誦明月之詩。歌窈窕之章。少焉月出於東山之上。徘徊於斗牛之間。白露横江。水光接天。縱一葦之所如。凌萬頃之茫然。浩浩乎如馮虛御風。而不知其所止。飄飄乎如遺世獨立。羽化而登仙。於是飲酒樂甚。與客擊舷而歌之。歌曰。桂棹兮蘭槳。擊空明兮泝流光。渺渺兮予懷。望美人兮天一方。客有吹洞簫者。先作下文問答之布置。倚歌而和之。其聲嗚嗚然。如怨如慕。如泣如訴。餘音嫋嫋。不絶如縷。舞幽壑之潛蛟。泣孤舟之嫠婦。蘇子愀然

飲み。樂むこと甚し。舷を扣いて之れを歌ふ。歌に曰く。桂の棹、蘭の槳、空明に擊て流光に泝る。渺渺として予れ懷ひ、美人を望む。天の一方に。客洞簫を吹く者有り。歌に倚て之れを和す。其の聲嗚嗚然として、怨むが如く慕ふが如く、泣くが如く訴ふるが如し。餘音嫋嫋として絶えざること縷の如し。幽壑の潛蛟を舞はし、孤舟の嫠婦を泣かしむ。蘇子愀然として襟を正し、危坐して客に問ふて曰く。何爲れぞ其れ然るや。客曰く。月明正襟危坐而問客曰。何爲其然也。客曰月明星稀。烏鵲南飛。此非曹孟德之詩乎。（就目前之景、憶起此句。）西望夏口。東望武昌。山川相繆。鬱乎蒼蒼。此非孟德之困於周郎者乎。方其破荊州。下江陵。順流而東也。舳艫千里。旌旗蔽空。釃酒臨江。横槊賦詩。固一世之雄也。而今安在哉。況吾與子。漁樵於江渚之上。侶魚鰕。而友麋鹿。駕一葉之扁舟。舉匏樽以相屬。寄蜉蝣於天地。渺滄海之一粟。哀吾生之須臾。羨長江之無窮。挾飛仙以遨遊。抱明月而長終。知不可乎驟得。託遺響於悲風。蘇子曰。客亦知夫水與月乎。（又就目前之景、生議論、）逝者如斯。而未嘗往也。盈虛者如彼。而卒莫消長也。（說月）蓋將自其變者而觀之。則天地曾不能以一瞬。自其不變者而觀之。則物與我皆無盡也。而又何

かに星稀に、烏鵲南に飛ぶと。此れ曹孟德の詩に非ずや。西夏口を望み、東武昌を望めば、山川相繆ひ、鬱乎として蒼蒼たり。此れ孟德の周郎に困められし者に非ずや。其の荊州を破り、江陵を下り、流れに順つて東する

羨乎。」（轉法）且夫天地之間、物各有主。苟非吾之所有、雖一毫而莫取。惟江上之清風、與山間之明月、耳得之而爲聲、目遇之而成色、取之無禁、用之不竭。是造物者之無盡藏也。而吾與子之所共適。客喜而笑、（回悲作喜）洗盞更酌。肴核既盡、杯盤狼藉。相與枕藉乎舟中、不知東方之既白。

此の文章は六節に分けて解くべし。第一節は赤壁に遊ぶ實際、に方るや、舳艫千里、旌旗空を蔽ひ、酒を釃み江に臨み、槊を横たへ詩を賦す。固に一世の雄なり。而るに今安くに在るや況んや吾れと子と、江渚の上りに漁樵し魚蝦を侶として麋鹿を友とす。一葉の扁舟に駕し、匏樽を舉



遊び方、面白き心持を述ぶ。蘇東坡は此の頃朝廷に罪を得て赤壁ある黄州の團練使に貶謫せられ、幸ひに此の近地に在りし故宋の元豐五年壬戌年の秋の七月十六日の夜、十六夜の月見せんとて、老子教の道士の楊世昌と共に、小舟に乘り、尤も酒肴を舟へ持込み、山中溪流なる赤壁の下に遊びたり（是れ迄の四句は賦の序文の如し。）然る處、其の愉快なる心持は、清風が徐々と吹來り、水波は興らず、酒盃を取擧げて客人（楊世昌）に屬し詩經中の明月の詩なる「月出て皎たり、佼人僚たり、窈糾を舒ぶ」と云ふを誦し、これも詩經の關雎の篇なる「關々たる雎鳩は河の洲に在り、窈窕たる淑女は君子の好仇」と云ふ章を歌へり。斯く娛むうちに、少爲たちて月が東山の上に出で、北斗星と牽牛星との間を徘徊し、白露は江一面に横ばり滿ち、江水に月光が映りて天に接き、一束の葦の如き小舟の如く所を行き次第に縱に任せ、萬頃もある茫然せし江面を渡ぎ、浩浩乎たる

げて以て相屬し、蜉蝣を天地に寄す。渺たる滄海の一粟、吾が生の須臾なるを哀み、長江の窮まり無きを羨む。飛仙を挾んで以て遨遊し、明月を抱いて長く終へん、驟に得可からざるを知り、遺響を悲風に託す。蘇子曰く。

廣大なる水の上にて、大虚に馮り添ひ、風に御り行き、舟の止まる所を知らぬ如くにて、飄々乎として此の人間世界も世の事を思ふをも打遺れて、身は獨立して、係累する者有るとも思はず。）身體に羽翼生じて、仙人に爲りて天へ登る如くに思ひたりとの意なり。

第二節は舟の進む面白き景況の實際と、朝廷を思ひて遠れぬ意とを述ぶ。さて登仙せんとする程の思ある最中に、是に於て酒を飲み、樂むこと甚しく。（送三王舍秀才二序の、吾又以悲二醉鄉之徒不過一也を、見合せて深く悟る可し。酒を飲ますとも、至極樂み得る奥義あり。それを搜し求む可し。）心持面白くなりしに依り、舷を扣きて浮かれて拍子どりて歌を謳ふ。其の歌の曰は桂の棹、蘭の槳にて、水に映入れる月光のある、遡遡りたる空明を擊かし、月光輝く流水を泝る。何とも言へぬ心地なれども、渺々として廣き遠方を眺め、予れは美人を望むで、天の



客も亦夫の水と月とを知る乎。逝く者は斯の如くして、未だ嘗て往かざるなり。盈虛する者は彼れの如く、而して卒に消長すること莫きなり蓋し將た其の變ずる者よりして之れを觀れば、則ち天地も曾て以て一瞬なること

一方に。と唄ひたりとの意なり。美人は在朝の同志の朝官を謂ふ。桂も蘭も香木なり。

第三節は、斯も唄ひ居て、卒に哀れを催すを述ぶ。客人の楊世昌が洞簫、我が尺八の樣なる笛）を吹く者ありて、自分が唄ふ歌に倚和せる。其の聲が嗚々然として何と無く物哀れに有りて、歌聲が、怨むが如く、慕ふが如く、泣くが如く、心を打明けて人に訴るが如く、餘音が幽かに渺く嫋々くして、聲の絶ゑぬことが繰糸の如し。依て之れを聞く所の幽壑の下なる、水中に潛み在る蛟龍は感動して起ち舞ひ、孤舟に乘り居る嫠婦は感動して悲泣するとの意なり。嫠婦は蘇子自分に當つるなり

第四節は、客と問答して、憂世の況を憂ひ了るなり。蘇子は哀を催し迫り、愀然として容色を變へ、襟を正して危坐し、客たる楊世昌に問ふて曰く。何とて斯も哀しく然るかと問ひ、客はこれに答へて、月明かに星稀にして烏鵲南に飛ぶとは此れ魏の

能はず。其の變ぜざる者よりして之れを觀れば、則ち物と我れと、皆盡くること無きなり。而るを又何ぞ羨まん乎。且つ夫れ天地の間、物各々主有り。苟くも吾が有する所に非ざれば、一毫と雖も取ること莫けん。惟江上の清風と、山間の明月と、耳之れを得て聲を爲し、目之れに遇ふて色を成す。之れを取るも禁ずること無く、之れを用ゐるも竭きず。是れ造物者の無盡藏なり。而して吾れと子との共に適する所と。客喜んで笑ふ。盞を洗



又喩へは渺たるバツと小さき一粒の粟が、滄海に浮け居る如し。されば生存へ居る間は固に短し。斯る吾が生存間の須臾（須臾は一晝夜廿四時の三十分一間）を哀み、此の赤壁の長江が窮まり無く命の長きを羨む。されど、斯く飛仙すると思ふ程の面白味を心に挾ち、斯も思ふ儘に遨遊し、此の清明なる月を眼に觀て心に抱き、長く樂みて樂みを終ふることは、躁に催して得べからざるを知る（是れにても通常物質的の高尚なる樂なり。彼の天命を樂む孔顏兩師の樂易と孰れを賢ると思ふ乎。）客は斯く答へ曰ひ、洞簫の遺る響を悲しき風に託せたりとの意なり。第五節は、長江の窮まり無きも、何とて羨しかるべきものかと客に述ぶるなり。蘇氏は楊氏に向つて、客よ。夫の水と月とを知るかよ。深く理義を考ふれば、水の如く逝く者は、斯の如く往きて還らぬと見ゆれども、未だ嘗て往き終らぬものなり。水源より又湧出でゝ循環して息まず。月の盈虛するも、一ヶ月内

太祖武帝となりし曹操（孟德は字）が作りたる詩に非ず乎。これより西の方夏口の地を望み、東の方武昌の地を望めば、山川が繆ひ合ひ、樹木が生茂り、鬱乎蒼々する地は此れ曹操が吳の將たる周瑜に困められし地ならずや。曹操は斯く大敗軍したれど同人が此の時荊州を破りて其の主劉琮を降參させ、江陵の地より流れに順ひて東の方赤壁の下に至るに方りては、其の兵船の軸と艫を啣み合ひて千里も續き、旌旗が空を蔽ひ、斯も盛々堂々たる軍中にて、酒を釃みて江に臨み、槊を横たへて詩を賦したる度胸は固に一世を蓋ふ第一位の英雄なり。而し其の曹操が今は安に在るかや。況てや曹操の富貴大勢力あるに及ばぬ吾れ（楊氏）と子（蘇氏）とが、此の江に漁し、渚の下りに樵し、魚や鰕類と侶となり、麋鹿をも友として、一枚の木葉の如き扁舟に駕り、匏樽を擧げて相ひに盃を屬し合ひ、思へば朝に生れて夕に死する蜉蝣虫（しろこ）の如き御互ひの身を天地間に寄せ

にて思へば彼れの如くなれど、盈月は前月と同一に、盈ちて虛くること故、卒に消長することは莫きなり。蓋ぶに將た、其の逝きて還らず盈虛する、變ずる者の理よりして觀察すれば、天地も曾して一瞬間も永く在ること能はず。又、水は往盡きず、月は永久消長すること莫き、變ぜざる者の理より觀察すれば、萬物の何にても、物と我れとは何れも皆、亡なり盡ること無きなり。而るを又、何ぞ長江の永久窮り無きを羨まんや。羨むことは無しとの意なり。(事は必ず再思して兩端を叩く事ぞよ。)第六節は、風月は天地間の物として、取りて禁ずること無く、用ゐて盡きざるを述べて滿足し了るなり。且夫れ天地間の物は各々所有主ある物あり。これは苟にも吾が所有に非ざれば、一毫にても取るべき理由無けれど、惟江上の清風と、山間の明月とは、耳に風聲を聞得て聲と爲し、月は目が之れに遇ひ見て色と成す。二物共に取りて禁ぜらるゝこと無く、用ゐて竭きず、

ひ更々酌み、肴核既に盡き、杯盤狼藉し相與に舟中に沈藉して、東方の既に白るきを知らず。

**字句解**

既望は、望月が既に盡きたりとの意にて、十六夜の月に名づく。

一葦、小舟を一葦と云ふは、詩經に一葦せば之れを杭らんとあるより出でたり。葦を一束大束にして、小舟の代りにしてその心づもり也。實際葦筏にて渡れる筈は無し。

美人は、同志の朝官、天一方は、朝廷を指す。

槊は、槍の如き兵器なり。

枕藉は、床を設けて寢るなり。

**讀法**

後赤壁の賦。蘇東坡。

是の歲十月の望、雪堂より步し、將に臨皐に歸らんとす。二客予に從ひ黃泥の坂



是れぞ造物者、即ち天の製物の盡くること無き藏なり。吾と子(楊氏)とその適用すべき所の物なりと曰ひ、客たる楊氏は喜んで笑ひ、盞を洗ひて更に酒を酌み交し、肴核は既盡し、杯盤は狼藉かされ、舟の中にて枕藉げて臥し、能く寢入りて東方が既や白み、夜が明けたるを知らざりしその意なり。

【文法】次なる後赤壁賦の終に、共に詔さむ。

## 後赤壁賦

蘇東坡

此の文章は、東坡又同年十月に赤壁に遊びしことを賦に作りしなり。

是歲十月之望。步自雪堂。將歸于臨皐。二客從予過黃泥之坂。霜露既降。

を過ぐ。霜露既に降り、木葉盡く脱ち人影地に在り、仰いで明月を見、顧みて之れを樂み、行々歌ひ相答ふ。已にして歎じて曰く。客有れども酒無し、酒有れども肴無し。月は白く風は清し。此の良夜を如何せんと。客曰く。今薄暮、網を擧げて魚を得たり。巨口細鱗にして、狀は松江の鱸に似たり。顧ふに安くにか酒を得る所あらん乎と。歸つて諸れを婦に謀る。婦の曰く。我れに斗酒有り。之れを藏むること久し。以て子が不時の需めを

木葉盡脱。人影在地。仰見明月。顧而樂之。行歌相答。已而歎曰。有客無酒。有酒無肴。倒裝句法、古練。月白風清。如此良夜何。客曰。今者薄暮。擧網得魚。巨口細鱗。狀似松江之鱸。顧安所得酒乎。歸而謀諸婦。婦曰。我有斗酒。藏之久矣。以待子不時之需。於是携酒與魚。復遊於赤壁之下。江流有聲。斷岸千尺。山高月小。水落石出。曾日月之幾何。



而江山不可復識矣。復字、與復遊復字相應、予乃攝衣而上。履巉巖。披蒙茸。踞虎豹。登虬龍。攀栖鶻之危巢。俯馮夷之幽宮。蓋二客不能從焉。劃然長嘯。草木震動。山鳴谷應。風起水涌。予亦悄然而悲。肅然而恐。凜乎其不可留也。反而登舟。放乎中流。聽其所止而休焉。時夜將半。四顧寂寥。適有孤鶴。横江東來。翅如車輪。玄裳縞衣。戛然長鳴。掠予

待つと。是に於て酒と魚とを携へ、復赤壁の下に遊ぶ。江池聲有り、斷岸千尺、山高く月小さく、水落ち石出づ。曾て日月の幾何して、江山復識る可からず。予れ乃ち衣を攝げて上る巉巖を履み、蒙茸を披き、虎豹に踞り、虬龍に登り、栖鶻の危巢を攀ぢ、馮夷の幽宮に俯す。蓋し二客從ふこと能はず。劃然として長嘯すれば、草木震動し、山鳴り谷應へ、風起り水涌く。予も亦悄然として悲み、肅然として恐れ、凜乎として其れ留まる可からんとし、二人の客(郭遘古耕道)が予(蘇東坡の自稱)に從ひ、黄泥坂と云ふ坂路を過りたり。時候は十月故、霜露が既や降りて木の葉が盡く脱落し、人影が地に印し在る故、仰ぎて天を見れば明月あり、顧みて月見ることを樂み、行歩しつゝ歌うたひ、客二人と互ひに、歌の後を付けて歌ひ行きたり。間も無く氣も付き、歎して、客は有れども酒無し、酒は有りても肴無し、月は白し風は清し、此の良き夜は此のまゝでは過せぬが、如何にせんかと言ひ出したるに、客は之れに應じて、今者の薄暮に、漁網を擧げて魚を得たり。其の魚は巨口にして細かき鱗あり、狀は有名なる味よき松江の鱸に似たり。斯く肴は有れども、顧ひみるに何處にか酒を得る所無きかと曰ひ、自宅へ歸りて婦に問へば、婦は我れに一斗の酒(支那の一斗は量少なし)有り。久しく藏ひ置きたるが、良人の不時の需用を待ち居たりとて出せり。是に於て三人は、酒と魚とを携へて、復赤壁の下に遊び、舟の舟に而西也。(用二也字一畫二上下段一)須臾客去。予亦就睡。夢一道士。羽衣蹁躚。過二臨皐之下一。揖予而言曰。赤壁之遊樂乎。問二其姓名一。俛而不答。嗚呼噫嘻。我知之矣。疇昔之夜。飛鳴而過我者。非子也耶。道士顧笑。予亦驚悟。開戸視之。不見其處。

此の文章は三節に分けて解くべし。第一節は東坡が七月に赤壁に遊びたる是の歳十月の十五夜に、東坡が物好にて建てたる雪堂に、晝間遊び居て、日沒より寓邸の在る臨皐の地へ將に歸

す。反つて舟に登り中流に放ち。其の止まる所に聽せて休す時に夜は將に半ならんとし、四顧寂寥たり。適ま孤鶴有り。江に横はりて東より來る。翅は車輪の如し。玄裳縞衣し、戛然として長鳴し、予が舟を掠めて西す。

中にて月を見て酒宴し、邊りの景色を觀れば、江の流れには水聲あり。江の岸は斷切りたる樣にて、見上ぐれば高さ千尺も有らんと見ゆ、山は高し、月は小さし。水は落ち減りて石が露はれ出で、曾て見しより日月は幾何たちしか、樣子が變りて、同じ赤壁の江山とは復識る可からず。異ふやうに思はるゝなり。第二節は、江岸の山に登りし況を言ふ。予は乃で衣服を攝げて山へ上り、嶮しき巖を履み、草木の生茂りたる蒙茸地を、搔き除け披き、虎や豹の如き象の岩に腰かけて踞り、虬龍の如き樹木に登り、鶻の栖む高く危なき巢に攀ぢ、馮夷と云ふ水神の住ふ幽き宮を俯して窺ひたるに、二客は從ふこと能はで舟へ歸り、自分は劃然と力を入れて物を破る如き大聲を發して長く嘯けば、邊りの草木は木魂に響きて震動し、山は鳴り、谷は應へ、風は起り、水が涌き、予も亦悄れて悲み、肅みて恐れ、凜乎として其處に留まる可からず。反つて舟に登り、舟を江の中流へ出して



須臾にして客去る。予も亦睡りに就く。一道士を夢む。羽衣蹁躚して、臨皐の下を過ぎ、予を揖して言つて曰く。赤壁の遊び樂しき乎と。其の姓名を問へば、俛して答へず。嗚呼噫嘻我れ之れを知れり。疇昔の夜、飛鳴して

往き放題に放ち、舟が止まる所に聽して休息したりとの意なり。第三節は鶴の精を夢に見しとの設け事を述ぶ。時に夜は夜半前にて、四方を顧るに、寂寥として淋しく、適しも一羽の鶴が江を横はり、東より飛來れり。其の翅は、車の輪程の大きさにて、玄き裳に、縞き衣服着て、戛然と長鳴し、予の乘れる舟を掠りて西へ行き、須臾に客は二人とも舟より上りて去り、予も亦臨皐の家に歸りて睡りに就きたり。然るに一人の道士を夢に見たるが、道士は羽衣を着て、蹁躚と臨皐の下を過り、予れに揖して、赤壁の遊びは樂しき乎と曰ふ。其の姓名を問へば、俛きて答へぬ。依て予れは考へて思ひ出し、嗚呼噫嘻我れは知れり。昨夜飛び鳴きて、我が舟べりを過りたるは予に非ざる耶と曰へば、道士は顧みて笑ふ。予れも亦驚きて夢が悟め、正夢ならんと思ひて、家の戸を開けて視れば、來たと思ひし處に見ゆざりしとの意なり。

我れを過りし者は子に非ずやと。道士顧みて笑ふ。予も亦驚き悟む。戸を開いて之れを視れば其の處を見ず。

讀法

阿房宮の賦。杜牧之六王畢つて四海一なり。蜀山兀として阿房出づ。三百餘里を覆壓して、天日を隔離す。驪山北に搆へて、西に折れ、直ちに咸陽に走き、二川溶溶として宮墻に入る。五歩に一樓、十歩に一閣、廊腰縵く回りて、簷牙高く啄む、各々地勢を抱き鉤心鬪角、盤盤焉たり。蜂



【文法】此の前後の二賦は、皆遊びを志せしものにて、記序の體にて、出すに韻語を以てする故、賦と曰ふ。(前の賦は十二回韵を易へ、後の賦は八回韵を易へたり)。而して其の物に託するに結らず、其の興に感ずるに脱さず。純乎たる化機なりとて、浦氏は許せり。

## 阿房宮賦

杜牧之

阿房宮は、秦の始皇帝の奢侈の極に達したる建築物なり。唐時代の文士杜牧、字は牧之が、其れを摸寫して賦體の文に作りしなり。

六王畢。四海一。伏後面議論、最妙。蜀山兀。阿房出。覆壓三百餘里。隔離天日。驪山北搆。而西折。直走咸陽。二川溶溶。流入宮墻。見宮殿廣大。五歩一樓。十歩一閣。廊腰縵回。簷牙高啄。各抱地勢。鉤心鬪角。盤盤焉。囷囷焉。蜂房水渦。矗不知其幾千萬落。長橋臥波。未雲何龍。複道行空。不霽何虹。高低冥迷。不知西東。歌臺。煖響。春光融融。舞殿。冷袖。風雨凄凄。一日之内。一宮之間。而氣候不齊。妃嬪媵嬙。王子皇孫。辭樓下殿。輦來于秦。朝歌夜絃。爲秦宮人。明星熒熒。

房水渦、蠹にして其の幾千萬落を知らず長橋の波に臥すは、未だ雲あらざるに何の龍ぞ、複道の空に行くは、霽れざるに何の虹ぞ、高低冥迷西東を知らず。歌臺の暖響は、春光融融たり。舞殿の冷袖は風雨凄凄たり。一日の内一宮の間にして、氣候齊しからず。妃嬪媵嬙、王子皇孫樓を辭し殿を下り、輦して秦に來り、朝歌夜絃し、秦の宮人と爲る。明星の熒熒たるは、粧鏡を開くなり。綠雲の擾擾たるは、曉鬟を梳るなり。渭流の膩を漲

開粧鏡也。綠雲擾擾梳曉鬟也。渭流漲膩棄脂水也。煙斜霧橫焚椒蘭也。雷霆乍驚宮車過也。逐勢忽及始皇敏妙轆轆遠聽杳不知其所之也。又逐勢作波瀾起下一肌一容盡態極妍。縵立遠視而望幸焉。有不得見者三十六年。燕趙之收藏韓魏之經營齊楚之精英幾世幾年伏下面六國之案取掠其人倚疊如山一旦有不能輸來其間鼎鐺玉石金塊珠礫棄擲



邐迤秦人視之亦不甚惜嗟乎一人之心千萬人之心也秦愛紛奢人亦念其家奈何取之盡錙銖用之如泥沙使負棟之柱喻中含秦之所以亡多於南畝之農夫架梁之椽多於機上之工女釘頭磷磷多於在庾之粟粒瓦縫參差多於周身之帛縷直欄橫檻多於九土之城郭管絃嘔啞多於市人之言語使天下之人不敢言而敢怒獨夫

之心。日益驕固。戍卒叫。函谷舉。楚人一炬。可憐焦土。嗚呼。滅六國者。六國也。非秦也。族秦者。秦也。非天下也。嗟夫。使六國各愛其人。則足以拒秦。秦復愛六國之人。則遞三世可至萬世而爲君。誰得而族滅也。秦人不暇自哀。而後人哀之。後人哀之而不鑑之。亦使後人復哀後人也。

此の文章は八節に分けて解くべし。第一節は、秦の始皇は山東



らすは、脂水を棄るなり。煙斜に霧横はるは、椒蘭を焚くなり。雷霆ありて乍ち驚くは、宮車の過るなり。轆轆として遠く聽ゆるは、杳として其の之く所を知らず。一肌一容、態を盡し妍を極め、縵く立ち遠く視て幸を望む。見るを得ざる者有ること三十六年。燕趙の收藏、韓魏の經營、齊楚の精英は幾世幾年か。其の人より取掠し、倚疊して山の如くなりし。一旦にして其の間に輸し來すこと能はざること有らんに、鼎は鐺にし玉は石にし



の齊、楚、燕、趙、韓、魏の六ケ國を滅ぼし、六國の王（其の實は諸侯の資格なれども王と僭稱せし者）は滅盡し畢り、四海（支那全國を謂ふ。）を一統して一國一帝王と爲りたり。然るに始皇は奢侈を極めて、阿房宮を建つる大土木の爲めに、蜀山の立木を伐盡し、山は兀山に成りて、其の代りに阿房宮殿が現出し、宮殿の敷地にして、方三百餘里（六丁一里）を覆ひ壓へ、高き建物にて、天なる大陽をも隔離て、北方なる驪山より建物を構築して、建來りて西方に折曲り、それが又直線に都たる咸陽に赴き、渭水と涇水との二川が溶々として、盛んに流れて宮殿周圍の墻の中へ入るとの意なり。

第二節は細かく宮殿の構造の樣子を述ぶ。其の樣子は、五歩（歩と云ふは左右の足を進めたる二足の事なり。）に高樓が一棟あり、廊下の腰が縵りと回り、簷の牙が高く出て、烏が食物を啄む嘴端の如くに見え、各〳〵何れも全

金は塊にし珠は礫にし、棄擲して邐迤たり。秦人之れを視るも、亦甚だ惜まず。嗟乎一人の心は、千萬人の心なり。秦紛奢を愛すれば、人も亦其の家を念ふ。奈何ぞ之れを取ることを錙銖を盡し、之れを用ゐることを泥沙の如けん。棟を負ふの柱は、南畝の農夫よりも多く、梁に架るの椽は、機上の工女よりも多く、釘頭の磷磷たるは、廈に在るの粟粒よりも多く、瓦縫の參差たるは、周身の帛縷よりも多く、直欄橫檻は九土の城郭よりも多く、

體の地面の勢を抱き持ち、屋の中心聚まる處が鉤針の如く、屋の簷角が觸合ひて鬪ふ如く、盤々焉として圜く高く大きく屈曲し、遠きより天井を仰望すれば、々焉として圜く高く大きく屈曲し、遠きより天井を仰望すれば、蜂房の如く、又水が溜りて渦卷く如く、蟲かに長く眞直に高く起り、其の樓閣の數が、幾千萬落あるとも知れぬ、廣大なるものなりとの意なり。

第三節は、あまり立派にて見て不審が起り、方角を取り失ふ樣子を述ぶ。阿房の地より渭水を渡りて、咸陽に至る間の廊下橋なる長橋は、波の上に臥すが如く、さすれば龍形に見ゆるが、龍に添ふべき雲が無し。未だ雲も無きに何の龍ぞや。矢張り長廊下橋なり。上下二重通行し得る複道が空中を行くは虹の如くに見ゆれど、虹は雨霽れて見ゆるものなるに、今日の如く天霽れざる日に何の虹ぞや、矢張り複道の虹の如き色合に彩色したるものぞよ。高低に目を疲らせられ、冥み迷ひて西さも東さも方角が知れぬとの意なり。

第四節は歌舞する美女の盛んなる況を述ぶ。舞蹈の地を爲る歌ひ臺の、三千人の美女の唄ふ口氣にて、暖かなると、聲の響とにて、春季の光景ありて、融々として長閑なり。又、舞殿の舞女の袖が、風を起して冷袖に爲るは、秋の風雨が凄々と凄きが如し。斯く一日の内に同一の宮殿の間にて、忽ち、春忽ち秋と變りて、氣候が齊しく無しとの意なり。

第五節は、宮女の樣子を述ぶ。秦は六國を滅ぼしたる故、六國王各自の王妃も嬪と云ひ媵と云ひ嬙と云ひたる王家の貴女や、六國王各自の子、孫を俘虜にして秦の都へ連れ歸れり。それを此處に言ふ事にて、六國王各自の妃も嬪、媵、嬙、王子、王孫は、住馴れたる我が王家の樓を辭し去り、殿を下り、輦車に乘せられて秦に連れ來られ、朝に歌ひ、夜に琴などを彈じ（これと晝夜に歌絃するなり。必しも朝のみ歌ひ夜のみ絃するに非ず。

管絃の嘔啞たるは、市人の言語よりも多からしめ、天下の人をして敢て言はずして敢て怒らしむ。獨夫の心は日に益々驕固なり。戍卒叫んで函谷擧ぐ。楚人の一炬に、憐む可し焦土となる。嗚呼。六國を滅ぼせし者は六國文を互ひに用ゐたりと知る可し。是れ作文の癖なり。胸中に此の如き互用にせしは皆同樣と思ひて意味を取るべし。さ無くば事實を誤まる恐れあり)。惘然なる哉奏の宮人と爲れり。さればば明星が熒々光るは、三千人の美女の粧鏡の蓋を開けたるなり。綠色の雲が擾々とするを見ゆるは、これも三千美女が朝な〳〵の曉に髮を梳くを見るなり。渭水の流れに膩を漲らすは、是れ亦三千美女が剝脫したる白粉の脂水を棄てたる故なり。煙が斜に棚引き、霧が空際に横はると見ゆるは、椒や蘭の香木を焚く煙なり。雷霆が轟き鳴ると思ひて乍ち驚くは、始皇の乘りたる宮車が過るなり。轆轆と鳴りて遠くに聽ゆるは、杳先きに爲りて、其の之く所を知らず。美人は始皇の寵幸を得たしと思ひて、一肌合、一容姿にも、態好かれと心を盡し、妍さを極め、修飾しらゝ限り、容飾さらゝ限りして、始皇の通行先の側らに、緩く立ち遠く視て、寵幸せられんことを望む。始皇の

なり。秦に非ざるなり。秦を族せし者は秦なり。天下に非ざるなり。嗟夫れ。六國をして各々其の人を愛せしめば、則ち以て秦を拒ぐに足る。秦復六國の人を愛せば、則ち三世を遞にして、萬世に至つて君たる可し。誰か得



在位は三十六年間なりしが、始皇を三十六年間に一回も見ざりし美女が有りしとの意なり。

第六節は珍奇なる高價物の夥多なるを述ぶ。燕、趙、韓、魏、齊、楚の六王各自が欲望して、精英なる物を手に入れ、寶物として寶庫に收藏せし珍寶、一代にて得たるものにては無く、幾世幾年を要せしとも知れず。其の間六王が、各自に其の國人より取り掠め、倚疊めて山の如くに積み置きたるものにてありしなり。されば一旦にして、王國都より此の阿房宮との間に、輸び來ること能はざること有らんに。斯も得難き寶物の鼎は鐺の如く、玉は石の如く、金は塊の如く、眞珠は礫の如くに思ひ、邐迤として途切〳〵に棄擲ありて、秦にては人民にても、之れを視ても亦甚だ惜しゝとは思はざりしとの意なり。

第七節は、始皇が奢侈を極めて亡びたる所以を述ぶ。嗟乎歎かはしきかな。一人たる始皇の心は、千萬人皆同じ心なり。秦主

て族滅せん。秦人自ら哀むに暇あらずして、後人之れを哀む。後人之れを哀んで之れを鑑せざれば、亦後人をして復後人を哀れましめん。

字句解

畢は、滅盡し畢るなり。四海一は、天下一統なり。覆は、覆ふ意故、字音をフクと讀む可し。フクと讀めば、覆へる意になり。

始皇が紛りに奢ることに愛着すれば、人民一般に亦各自其の家を富まして奢らんと念ふ。始皇は奈何なる了簡ぞよ。金錢を租稅として取立てる事は、錙銖の細かき稅金まで取り盡し、而して其の人民の膏血たる金錢を泥沙の如くに濫用し、使用せし途を言へば、阿房宮の建築費に費れ上げ、棟を負せる柱の數は、南畝に居る農夫の人數よりも多からしめ、梁に架けたる椽の數は、織機の上に腰かけ居る工女よりも多からしめ、釘頭の磷々するは、戾に在る粟粒よりも多からしめ、瓦の縫せ目の參差に溝立ちたる數は、身に周ふ衣服の帛の縷よりも多からしめ、直横の欄檻の數は、九土の城郭の數よりも多からしめ、笛吹き琴彈く音樂の嘔啞しき音は、市人の言語よりも多からしめ、天下の人民の難儀するも構はずに、奢侈を極め我儘增長しきる故に、天下の人民に敢て不平不服を言はさずに敢て立腹さする。人望も同情も無き獨夫たる始皇の心は、日に益々驕ぶり固まり、



りて相違すればなり。走は、趨く意なり。溶溶は、盛んに流るゝ貌。盤盤焉は、盤環の貌。囷囷焉は、屈曲の貌。蠢は、長直の貌なり。落は、屯聚の意義なり。融融は、長閑なる貌。凄凄は、すごき貌なり。嬪、媵、嬙は、妃の附女なり。皇孫は、皇さて別に意あらず、王孫の意なり。熒熒は、星がキラ〳〵スル光の貌なり。擾擾は、集まりてモジヤ

憎まるゝ極度に達したる故に、始皇が崩ぬるや否や、戍卒たる陳勝が、叫んで兵を起し。それを秦の敗れの始めとして、漢の高祖が函谷關を破つて、都の咸陽に入り、秦帝子嬰は降參し、續いて楚の人たる項羽が行き、阿房宮を一炬に燒討して、斯も立派の建築物が、憐む可し焦土に成りたりとの意なり。

第八節は、六國も秦も亡びたる理由を述べて、後の人の禁戒とせしなり。嗚呼歎かはしき哉、淺ましきかな。愚なるほど情けなきものは無し。六國を滅ぼしたる者は六國の王が自ら亡ぶる理由を有する心がけと其の行爲とありて、我れと我れが滅ぼしたる理合なり。決して秦が滅ぼせしには非ざるなり。又、秦を族滅せしも、秦が自ら族滅すべき理由ある心がけと行爲と有りし故なり。天下の人が族滅させたるに非ざる理合なり。嗟惜きこと哉、夫れ六國王各自に其の人民を愛せしめしならば、則ち以て秦を拒ぐに足らん。秦も亦復六國の人民を愛せしならば、

くする貌なり。
轆轆は、車響の聲貌なり。
杳は、遙にて眼の屆かぬ貌なり。
望幸は、寵幸を求むる意にて行幸を拜觀する也。
邐迤は、斷續する貌なり。
磷磷は、石の光澤のキラツク貌なり。
參差は、長し短しなり。
參は字音シンなり。

**讀法**

李愿が盤谷に歸るを送る序。韓昌黎。

太行の陽に盤谷有り

則ち始皇、二世、三世と續くことは遽か、萬世に至つても君たる可し(これは大袈裟なり)。誰れか族滅し得んや。秦人は奢侈我儘に心を奪られ居て、自分を哀れむに暇あらずして、後の人が滅亡を哀れむ。されど此の後の人も、秦を哀れんで秦を鑑戒の資と爲ざれば、亦已れより後の世人に復び已れたる甲部後人を乙部たる今一つ後世人に哀れましめん。との意なり。

【文法】此の篇は宏壯巨麗にして、上下に馳騁すと邵氏評せり。

## 送李愿歸盤谷序

韓昌黎

李愿は隱士にて道義の節操高き人なり。此の人官に在りしが、辭して其の住地たる盤谷に歸るを送りたる序文なり。

太行之陽有盤谷。起法有ア獲ニ壓全篇之勢ト盤谷之間。
泉甘而土肥。而字古雅不ル凡、草木叢茂。居民鮮



盤谷の間は、泉甘くして土肥えたり。草木は叢茂し、居民は鮮少なり。或ひと曰ふ。兩山の間を環るを謂ふ。故に盤と曰ふと。或は曰ふ。是の谷や、宅幽にして勢ひ阻し。隱者の盤旋する所と。友人李愿之れに居る。愿の

少。或曰。謂其環兩山之間。故曰盤。二曰字生ニ波瀾ニ、或曰。是谷也。宅幽而勢阻。隱者之所盤旋。舉ニ兩說一爲ニ波瀾ニ、友人李愿居之。【著ニ此一句ニ抱ニ上下ニ、是續脈處、愿之言曰。人之稱大丈夫者。我知之矣。貫ニ統下面其賢不肖何如也、○起レ下同ニ赤壁吾知レ之矣字ニ、利澤施於人。名聲昭于時。坐于廟堂。進退百官。而佐天子出令。其在外則樹旗旄。羅弓矢。武夫前呵。從者塞途。供給之人。各執其物。夾道而疾馳。喜有賞。怒有刑。

言に曰く。人の大丈夫と稱する者は、我れ之れを知れり。利澤人に施し、名聲時に昭かに、廟堂に坐し、百官を進退し、而して天子を佐けて令を出だす。其の外に在りては、則ち旗旄を樹て、弓矢を羅ね、武夫前に呵し、



才俊滿レ前。道二古今一而譽。盛德入レ耳而不レ煩。曲眉豐頰。清聲而便體。秀外而惠中。飄二輕裾一。翳二長袖一。粉白黛綠者。列レ屋而閑居。妬レ寵而負恃。爭レ妍而取レ憐。大丈夫之遇二知於天子一。用二力於當世一者之所レ爲也。（大丈夫云云、句頭不レ冒二是字一、筆力不二軟弱一）吾非二惡レ此而逃レ之。是有レ命焉。不レ可二幸而致一也。窮居而野處。升レ高而望レ遠。坐二茂樹一以終レ日。濯二清泉一以自潔。採二於山一美可レ茹。釣二



從者途に塞がり、供給の人、各々其の物を執り、道を夾んで疾馳し、喜べば賞有り、怒れば刑有り、才俊前に滿ち、古今を道ふて盛德を譽む。耳に入りて煩はしからず、曲眉豐頰、清聲にして便體、秀外にして惠中、輕裾



於水一鮮可レ食。起居無レ時。惟適之安。與二其有レ譽一於前一。孰若無レ毀一於其後一。與二其有レ樂一於身一。孰若無レ憂一於其心一。車服不レ維。刀鋸不レ加。（補二上面未レ盡、逐字接二下勢一）理亂不レ知。黜陟不レ聞。大丈夫之不レ遇二於時一者之所レ爲也。我則行之。（起下法、同二上段一）伺二候於公卿之門一。奔二走於形勢之途一。（現二此一人一、上面二人、忽有二生色一）足將二進而趦趄一。口將レ言而囁嚅。處二汙穢一而不レ羞。觸二刑辟一而誅戮。僥二倖於萬一一老

死而後止者。其於爲人。賢不肖何如也。昌黎韓愈聞其言而壯之。與之酒而爲之歌曰。

盤之中。維子之宮。盤之土。可以稼。
盤之泉。可濯可沿。盤之阻。誰爭子所。窈而深。廓其有容。以下布演首篇盤義、繚而曲。如往而復。嗟盤之樂兮。樂且無央。承上起下、虎豹遠迹兮。蛟龍遁藏。鬼神守護兮。呵禁不祥。飲且食兮。壽而康。無不足兮。奚所望。膏吾車兮。秣吾馬。從子于盤兮。終吾生以徜徉。

此の文章は五節に分けて解くべし。第一節は、李氏の隱遁地の好きことを述ぶ。さて言ふに、太行山の陽に、グル〳〵山を環る谷がある。其の谷間は、泉の水の味が甘くて、土地は肥地で、草木は叢り茂り、住居する人民は鮮少し。或る人は、兩山の間を環れる地故に盤と曰ふと言ふ。又別なる或る人は、是の谷は宅地が幽かくて、地の勢が阻しくて、世に隱るゝ賢人が、山を廻りて遊ぶに好き所と曰ふ。友人の李愿は此の地に居るとの意也。第二節は韓氏が、李氏の言ひたる大丈夫談を取りて言ひ述べるなり。李愿曰ふには、世人が大丈夫と稱ふ人物は、我れ能く其



を飄へし、長袖を翳し、粉白黛綠の者、屋を列ねて閑居し、寵を妬んで負恃し、妍を爭ふて憐みを取る。大丈夫の天子に遇知せられ、力を當世に用ゐる者の爲す所なり。吾れ此れを惡んで之れを逃るゝに非ず。是れ命有り。幸ふて致す可からざるなり。窮居して野處し、高きに升りて遠きを望み、茂樹に坐して以て日を終へ、清泉に濯ふて以て自ら潔くし、山に採て美なるは茹ふ可く、水に釣りて鮮けきは食ふ可し。起居時無く惟適に之れ安んず

の思想行爲を知り居る。人が利益を受くる樣に、恩澤を廣く施し、名が當時に昭かに顯はれ、廟堂に坐り、百の官吏を役づけ、免じ、思ふまゝに進退し、天子を輔佐して政令を出し、地方へ出て廟堂の外に在りては、一地方の長官にて、例へば師團長なれば其の將旗と云ふ物の如く、長官の目印の旗旄を樹て、弓矢を持ちたる警固の武夫を身側に羅張りたる如く列ばせ、道を行くに武夫に前呵させて通行人を避けさせ、從者が途一ぱいに列び塞がり、我が身に物を供給する係りの人は、各自に食料や調度の物を執ち、道途の兩傍をば、夾み行き、ソレ御用とあれば、命令に後れて御機嫌を損じぬ樣にと畏れて疾く、馳せる。是れ程威權ある身分(我が當時の大名の如し)故、喜べば人を賞し、怒れば人を刑すること有り。又、燕居無事の日には、俊才の者が御前に居列び滿ち、古今の盛德者を引いて自分の身に當て吳れて、已れを盛德者なりと譽めて吳れる。嬉しき故に

○小心文

其の前に譽れ有らんよりは、其の後に毀り無きに孰若ぞ。其の身に樂み有らんよりは、心に憂無きに孰若ぞ。車服維がず刀鋸加はらず、理亂知らず、黜陟聞かざるは、大丈夫の時に遇はざる者の爲す所なり。我れは則ち之れを行はん。公卿の門に伺候し、形勢の途に奔走し、足將に進まんとして趦趄し口將に言はんとして囁嚅し、汙穢に處て羞ぢず、刑辟に觸れて誅戮せられ、萬一を僥倖して、老死して後に止む者は、其の人と爲りに於て賢



其の諛言は耳に入りて煩はしからず。それのみならず、曲眉にて、豊りしたる頰の美女、清しき聲、便やかなる體、外貌が秀でゝ、心中に惠深き、撰拔の尤物が、輕く衣服の裾を飄へし、長き袖を翳し、粉白、綠黛を施して修飾し、御機嫌取する妾が、何人も衆くありて、屋を列べて閑居し、妾の人員が多き故に、御用勤は稀に番が廻る故に閑にて居り、何れも互ひに寵愛しらるゝ妾を妬み、我れこそ美女なりとて各自負恃して、娉ことを競爭して主人の愛憐心を取る。斯る巾利幸運を得るは、大丈夫で天子に遇ふて我が器量を知られ、大官に昇りて力を當世に用ゐる者の爲す所なり。吾れは此の幸福を惡びて逃るでは無いが、是れには運命が有りて、幸めて身に致す可からざるなり。今一種大丈夫あり。茅屋に窮居し、山野の寂しき地に處り、氣儘らしゝて、高き所に昇りて遠き地を望み、茂りたる樹の林中に坐して終日氣儘に暮らし、清泉にて身を濯ひて心を潔白にし、

不肖何如ぞやと。昌黎の韓愈其の言を聞いて之れを壯とし、之れに酒を與へ、之れが歌を爲つて曰く

盤の中は維れ子が宮なり。盤の土は以て稼す可し。盤の泉は濯ふ可く沿ふ可し。盤の阻は誰れか子が所を爭はん。窈にして深く、廓として其れ容るゝこと有り。繚りて曲り、往くが如くにして復る。嗟、盤の樂み、樂み且つ央ること無し。虎豹迹を遠ざけ、蛟龍遁れ藏る。鬼神守護し不祥を呵禁す。飲み且つ食ひ、壽にして康し。足らざること



山に採りて美味なる果實を茹ふこと自在、水にて釣りて鮮らしき川魚は食ひ次第に食べ、起居は定時無く氣分に任せ、惟心に適ふ樣にして氣を安んじる。生前に大官に昇りて譽められんよりは、死後に毀を受けること無きと孰れが若きぞ。又、身體に樂み有らんよりは、心中に憂無きと孰れが若きぞ。勤務を爲ざれば役向の乘車や朝服にて身を維がるゝことは無し、役失にて卑を得ることも無き故、刀鋸を加けず。國の理まりあるも亂れあるも知らず。任官を黜けらるゝ事も、陟せらるゝことも聞かず。これは大丈夫が時に遇はずして、不運なる者の爲す所なり。我れは之れを行はん。處で一種大丈夫にて無き人格の者がある。これの行爲は、（諂諛運動僥倖狙ひ一途にて）。公卿の門へ伺候に度々行き、形勢ある要路官吏の途を奔走し、一途に官途に引上げ貰ふ身上頼に熱心し、頼みかれて、足は今進まんとして趦趄し、先方へ行きても、頼む人の前にて、頼むことを言はんとして、



嚬嚬り、兎角言ひ出しかれて、言ひ得ずに、只困しき諛言諂笑のみ強めて歸ることになり。斯る醜態を極め、正義心ある人より觀察すれば、全然汚穢なる處に居て（心が）羞ぢず。或は、頼む宛なる人の私曲に關係して、其の連坐になり、刑辟に觸れて誅戮しられ、前科者の肩書付に爲りても官途に就くことに熱中して、萬回に一回を僥倖して（なさけない）斯するうちに老いて死に、死ぬる迄、しつこく汚れて、死して後に止む者（蠅人間）は、其の人と爲り（人格）に於て、其の者は賢人か。不肖者か。何れなるか。何如であらん。（不肖者たるは知れきりたる意を含むなり。）と。なり。昌黎生れの韓愈は、其の李愿の言ふを聞きて、元氣なる言と感じ、李氏に酒を馳走して、李氏の爲めに歌を爲つて歌ひたり。其の歌の辭は、

盤谷の中には維れ子の宮が在る。盤谷の土質は稼が可る。盤谷の泉は物も濯へれば沿ひて遊びも可る。盤谷の阻しき雅致ある

好き地は誰れも手の住所を取らんとて爭はんや。誰れも爭ひはせぬ。而して廬の構造は奥深く、窈として奥が遠く思はるゝ、又、廓然として能く人を容るゝ面積ある。さて又廬は繚つて曲り、入つて歩めば、專ら往く樣にて、クルリと故へ復る。嗟、盤谷の樂しきことよ。樂んで且つ其の樂みは央ることなし。山深ければ危險なるに、虎豹は迹を遠ざけ、谷川なる蛟龍は遁れ藏れ、鬼神は守護成し下され、不祥を呵り禁めて下され、飲み且つ食ふに不足無く、壽長く、健康なり、何も不足は無き故、奚ぞ他に望む所あらんや。他に望むこと無し。斯る極樂地故に、我れは吾が車の輪軸に膏さし、車に繫る馬に秣かひ、盤谷へ行き、子に從ひて徜徉し、吾が一生涯を終らんぞよ。との意なり。

【文法】此の篇は、議論平正にて、且つ世故人情を曲盡す。其の間又格言多し。と林氏評し、樓氏は、終篇全く李愿の說話を擧げ、自說は只數語なり。其の實は李愿の言に非ず。別に一格式とす。

◎小心文

無し。奚ぞ望む所あらん。吾が車に膏さし、吾が馬に秣ひ、子に盤に從ひ、吾が生を終へて以て徜徉せん。

**子句解**

孰若は、何方が好き乎との意なり。

刀鋸は、強ち斬る刑に非す。處刑と云ふ套語也。

理亂は、治亂に同じ。

**讀法**

歸去來の辭。陶靖節。

歸去來辭　陶靖節

此の文章は陶淵明が彭澤縣の令を辭して鄉里に歸りしときに自己の思想を吐出せし文章なり。故に歸去來辭とす。陶淵明は東晉の宰相たりし陶侃の曾孫なり。靖節は號なり。

歸去來兮。田園將蕪。胡不歸。既自以心爲形役。以下胡不歸之注脚奚惆悵而獨悲。悟已往之不諫。知來者之可追。實迷途其未遠。覺今是而昨非。舟遙遙以輕颺。風飄飄而吹衣。問征夫以前路。恨晨光之熹微。乃瞻衡宇。載欣載奇。僮僕歸去來辭

**子句解**

歸去來は、歸ると決心して、歸らう。去來として歸去發足の掛聲かくるなり。

辭、此の辭は賦に類する文なり。

**讀法**

歸りなん去來。田園將に蕪れんとするに胡ぞ歸らざらんや。既に自ら心を以て形ちの役と爲せり。奚

◎小心文

ぞ惆悵して獨り悲まん。已往の諫めざるを悟り、來者の追ふ可きを知る。實に途に迷ふこと其れ未だ遠からず。今は是にして昨は非なるを覺ふ。舟遙遙として輕く颺り、風飄飄として衣を吹く。征夫に問ふに前路を以てす晨光の熹微なるを恨む。乃ち衡宇を瞻て載ち欣び載ち犇る。僮僕懽び迎へ、稚子門に候つ。三逕は荒に就けども、松菊猶ほ存せり。幼を携へ室に入る酒有りて樽に盈てり。壺觴を引き以て自ら酌み、庭柯を眄めて以て顏せ



懽迎稚子候門三逕就荒松菊猶存
携幼入室有酒盈樽引壺觴以自酌
眄庭柯以怡顏倚南窓以寄傲審容膝
之易安園日涉以成趣門雖設而
常關策扶老以流憩時矯首而游觀
雲無心以出岫鳥倦飛而知還景翳
翳以將入撫孤松而盤桓歸去來兮
請息交以絶遊再提起句其意謂世故已如此反覆思之不得不歸也世
與我以相遺復駕言兮焉求悅親戚
之情話樂琴書以消憂農人告余以
春及將有事於西疇或命巾車或棹
孤舟既窈窕以尋壑亦崎嶇而經丘
木欣欣以向榮泉涓涓而始流羨萬
物之得時感吾生之行休已矣乎寓
形宇內復幾時曷不委心任去留胡
爲乎遑遑欲何之富貴非吾願帝鄉
不可期懷良辰以孤往或植杖而耘
耔登東皐以舒嘯臨清流而賦詩聊

を怡ばしむ。南窓に倚り以て傲を寄す。膝を容るゝの安んじ易きを審かにす。園は日に渉りて趣きを成し、門は設けたりと雖も常に關せり。策は老を扶けて流憩す。時に首を矯げて游觀す。雲は心無くして岫を出で、鳥は飛ぶに倦んで還るを知る。景は翳翳として將に入らんとするも、孤松を撫して盤桓す。歸去來、請ふ交りを息め以て遊びを絶たん。世と我れと以て相遺る。復駕して言に焉んか求めん。親戚の情話を悅び、琴書を樂み、



## 乘化以歸盡樂夫天命復奚疑。一篇 警策、

此の文章は二節に分けて解くべし。第一節は官途に在るを厭ひ辭職して鄉里へ歸り、自得安心して、不在中見ざりし庭園を見て樂む況を述ふ。陶氏は彭澤縣令を奉職し居たる處、或る日に郡の太守より督郵と云ふ小吏を遣はせしに、督郵は横柄にて、郡衙の御用故束帶して見へよと曰ひたり。依て陶氏は憤さして、嗚呼我れ五斗米程の薄給を受くる爲めに腰を折りては鄉里の小兒に對しても恥かしゝと思ひ、早速辭職書を出し、固より家族は鄉里の自宅に置きありて、自己と僕のみなれば身は輕し、支那里程にて百里程ある鄉里の南村へ、川夜船に乘りて直ぐ出發して自宅へ歸れり。歸ると決心したる心中より書き始めて、さア歸らん。鄉里の田園は將に蕪れんとするに、胡とて歸らずに居らるゝものか。今日迄は我れと吾が、大切なる心を身體の形ちに使役しられて居たり。後悔ぢや〳〵。併し惆悵さ、氣を落して恨み、獨りくよ〳〵悲むは無益なり。已往りたる事は諫めぬこと、來者こそ追ふて改心することゝ悟り知りたり。是れ迄は心得違にて、事物の悟りの途に迷ふたが、其れ未だ遠く迷ひ込まざりしこそ幸ひなれ。今日の爲る事は是にて、昨日爲せし事は非なりき。能くも心付たりと自得し安心して、さて夜の便船に乘り、舟を出せしに、舟は搖々と搖り動き進み、輕く帆風で颺り行き、風が飄々と衣を吹き、進み〳〵て黎明に近づき、乘合ひたる征夫に前路の事などを問ひ、鄉里へ近づきし故、自宅が見ゆかと望むに、晨の光が日の出前にて熹微故、前方が判然見ゆぬを、もどかしく思ひて恨みたり。兎角するうち夜は明離れ、乃で我が家の衡宇が瞻たる故、載ち欣んで犇に門前へ歸れば、僮僕が懽んで迎へ、稚子は門邊に候うけ、門に入りて庭園を見れば、庭園内の松、菊、竹の三逕に雜草が生茂

以て憂を消す。農人余れに告ぐるに春の及べるを以てす。將に西疇に事有らんとす。或は巾車に命じ、或は孤舟に棹し、既に窈窕として壑を尋ね、亦崎嶇として丘を經。木は欣欣として榮ふるに向ひ、泉は涓涓として始めて流る。萬物の時を得るを羨み、吾が生の行々休むを感ず。已ぬるかな。形ちを宇内に寓すること、復幾ばく時ぞや。曷ぞ心を委して去留に任せざる。胡爲れそ遑遑として何くに之かんと欲する。富貴は吾が願ひに非ず。帝

り、荒れてはあれど、松ち菊も猶り存る。それより幼兒を携れて室内へ入れば、酒が樽に盈ちあり。早速杯盤も酒の肴も出る。壺と觴とを手に取りて、手酌にて酒を飲み、飲つゝ庭園の柯を眄めて怡ばしき顏つきに爲り、南手の窓に片肱かけて、足を伸ばして寄傲ぎ、膝を容るゝのみの小邸にても安心し易きを心中に審かに自得し、此の日は樂しく暮らし、其の後、日々庭内を渉きて、草も刈らせ、風致を好くして趣味を成し、何處へも出でず、門は設け有りても常に關し置き、歩き續くときは策つきて老の身を扶け、思ひ付次第に流に足を憩め、時々頭首を擡げて眼を游ばせ觀まはし、見ると雲は心無く山の穴たる岫より出で、上り行き、日沒には空飛ぶ鳥が飛倦みて、還るを知りて樹に向つて還り宿ろ、夕景の日光が薄暗くなりて、日が入らんとし て、孤松を撫ばしく思ひ、其を撫〻、クル〳〵廻り居るとの意也。

第二節は世人と交遊するを絶ち、我れ一人を善くする意中を述ぶ。當時は東晉の亡ぶる際にて、五代の宋の武帝劉裕に代られたる程なれば、亂世の小人のみにて、顏延年など僅の知己より無かりしなり。依て、斯く家に歸去り來りたれば、身は請はくば交遊を絶息して、世と我れと遠れ相ひ、復び車馬に駕して爲こにか奉職を求めんや。求めはせぬ。親戚の者と、道に叶へる情誼の話をして悅び合ひ、彈琴と讀書とを樂み、以にて憂き事を消れ、農業を營て生活さん。村内の農人は、春が及たとて余に告げたり。されば西疇に仕事有らんとする。これに掛かれば氣が晴れて世の憂きことも思はぬ。と。陶氏は斯く心を持直して、農事使用の小車を、布にて能く拭かせて用意し、陸路は之れにて農品を運び、谷川は孤舟を使用し、山中なる窈窕き壑川を尋れ、陸は崎嶇しき丘を經り、春季の好時節なれば、木は欣々して綠葉を生じて榮ふるに向ひ、泉の水は雪溶きりたる故に涓々と流れ始し。斯も萬物が時を得て榮ゆくを羨み、吾が生命は

郷は期す可からず。良辰を懷ふて以て孤り往き、或は杖を植て、耘耔し、東皐に登つて舒ろに嘯き、清流に臨んで詩を賦し、聊か化に乘じて盡るに歸す。夫の天命を樂んで復奚をか疑はん。

**字句解**

年月の立ち行くうちに、生動の作用が休みて死ずることを、非常に感じて哀れを催す。世に出ることは已めんかな已めたり已めたり。此の身の形體を、此の宇内に寓して居る間は復幾時あるぞ(自問自答)曷として心を成行次第に委せて、死去するならば死去に、生留まるならば生留まるに、一切天命次第に任さぬか。何として遑々と徘徊ふて、何處に之かんと欲ふぞや。迚も富貴は得べからざれば、富貴を得たしとは吾が願望に非ず。帝鄉なる京師へ行きて、大官に擧用さるゝは期に可らず。それよりは、此の春の良辰を心に懷ちて、孤り氣樂に耕地へ往き、或は倚きたる杖を植て置きて耘とり、耔かひ、東の皐へ登つて舒く嘯き、清き流れの谷川端へ臨き、卽興の詩でも作つて賦じ、聊か吾が身を惜まず。天命の造化の成され次第に任せ、命が盡きて死すれば其れに歸して其れ迄の運命と諦め、夫の人として免れざる天の命令通りを樂みて、其の餘に復た奚をか疑はんや。今より

形役とは、貴重なる天性のまゝの良心を、比較的賤しく輕き外物の欲に使役せしむるを謂ふ。

惆悵は、傷み恨みて後悔する貌なり。

遙遙は、搖搖の意なり。

熹微の熹は、光輝の仄なること。

寄傲の傲は、形容傲る也。

策は、竹の杖なり。

流憩の流は、心任せに歩行する意なり。

岫は、山の穴なり。

右の他は、釋文右側の傍訓を見る可し。



死ぬる迄は、專ら天命を樂むと決心するとの大悟道を見付けたる意なり。

【文法】此の文は高風逸調なり、道義を深く識る者に非ざれば作ること能はずと、吳氏は評せり。尙ほ木文の割注を見るべし。

第六卷の首なる、諸葛武侯の前出師の表と、此の歸去來の辭とは、作者は自己の志節進退上に關係せし眞率なる文にて、それを自ら述べたること故、一字一句赤心より出でざるは莫し。兎にも角にも先づ文意を明知して、陶氏に同情を寄せ、自ら陶氏の意志を己れの意志として、考察すれば、作意を得るに庶幾からん。前出師表に於ても、自ら孔明の地位に處り、孔明の心を己れの心として見るべし。他の飾り氣ある文章とは異なり。

# 文章軌範卷之七終

明治四十三年八月五日印刷
明治四十三年八月十日發行

釋義者　竹子　恭

定價金六拾錢

發行者　大阪市南區安堂寺橋通四丁目二四二番邸　田中太右衛門

發行者　大阪市南區安堂寺橋通四丁目二三四番邸　大塚宇三郎

印刷者　大阪市西區立賣堀裏町一八八番邸　吉田由治郎

發賣元　大阪市南區心齋橋通安堂寺町南へ入　田中宋榮堂

著作權所有

ポケット

# 和漢文學叢書

## 發行書目

- 近古史談新釋　洋裝全一冊　定價金六十錢　郵送料六錢
- 論語新釋　洋裝全一冊　定價金六十錢　郵送料六錢
- 小學新釋　洋裝全一冊　定價金六十錢　郵送料六錢
- 文章軌範新釋　洋裝全一冊　定價金六十錢　郵送料六錢
- 西國立志編　洋裝全一冊　定價金四十錢　郵送料四錢
- 菜根譚新釋　洋裝全一冊　定價金五十錢　郵送料四錢
- 和漢名家詩鈔　洋裝全一冊　近刊
- 觀世謠獨吟集　洋裝全一冊　近刊
- 孝經忠經新釋　洋裝全一冊　近刊
- 大學中庸新釋　洋裝全一冊　近刊
- 孟子新釋　洋裝全一冊　近刊
- 平家物語新釋　洋裝全一冊　近刊
- 徒然草新釋　洋裝全二冊　近刊


發行元

大阪市南區心齋橋通安堂寺町南入

田中宋榮堂

261
451

100681-000-4

特63-759

文章軌範新釈

竹子　恭／編

M43

DBW-1691